

#### (46) 魂の偉大さ（「或る反時代的人間の偵察行」の46）

哲学者が「沈黙する」のは「魂の高さ」でありうるし、「矛盾する」のは「愛」でありうる。「嘘をつく」ことが「認識する者の礼儀作法」である。そして、「最も品位のないもの」を恐れないことも「魂の偉大さ」でありうることを付け加えなければならない。愛する女はその名誉を犠牲にし、「愛する」認識者はおそらくその「人間性」を犠牲にする。そして、愛した神はユダヤ人となったのである。

#### (47) 美への肉体的修練（「或る反時代的人間の偵察行」の47）

「美」は「偶然」ではなく、「勝ち取られた」ものであり、また幾世代に亘って蓄積された労苦の成果である。最上の基準は、自分自身に対しても自分を「放任して(gehen lassen)」はならないということである。キケロの時代アテナイでは、男性や青年たちは「美」において女性をはるかに凌駕していた。それは彼らが「美」のために労苦と努力を自らに求めてきたからである。まずは「肉体」を説得しなければならず、自らを「放任しない」人々とのみ暮らすべきである。このようにすれば二、三世代のうちには、すべてが「内面化」される。大切なことは、そのような「修練(die Cultur)」を適切な場所で始めることである。それは「魂」ではなく、「肉体」であり、「態度」、「摂食法」、「生理学」である。この意味でギリシヤ人は歴史上の「第一級の文化的出来事」であり、それに対して「肉体」を軽蔑したキリスト教は人類最大の不幸である。

#### (48) 自然への復帰・ナポレオンとルソー（「或る反時代的人間の偵察行」の48）

私の語る「自然への復帰(Rückkehr zur Natur)」ということとは、「後戻りすること(ein Zurückgehn)」ではなく、「昇っていくこと(ein Hinaufkommen)」である。それは「高く自由で、恐ろしくすらある自然と自然性」へ昇ることであり、その「自然と自然性」は「大いなる課題と戯れる(mit grossen Aufgaben spielen)」ものである。ナポレオンはその「自然への復帰」の一つである。

ところで、ルソーも「自然への復帰」ということを言うが、彼は実際どこへ戻ろうとしていたのか。彼は「最初の近代人」であり、「理想家と賤民(Idealist und canaille)」とを一人で兼ねている人物である。彼は「近代の入り口」に陣取り、彼の「道徳性」は「革命」にも影響を与えている。すなわち、「革命」は「理想家と賤民」という「二重性」を世界史的に表現したものであるが、彼の「道徳性」はこの「革命」のいわゆる「真理」、「平等の教え」に影響を与えている。

しかし、この「平等の教え」以上の「有毒な毒」はなく、それは「正義の終焉」であるのに、「正義そのもの」を説いているかのように装っている。「等しい者に等しいものを、等しくない者には等しくないものを」、これこそが「正義の真の語り」であり、「等しくないものを等しくしてはならない」。この「平等の教え」をめぐって極めて悲惨で血なまぐさいことが起こったということは、「近代的理念」に或る種の栄光と火の光を与えて来た。とはいえ、このことは「革命」にこれ以上の敬意を払う理由とはならない。